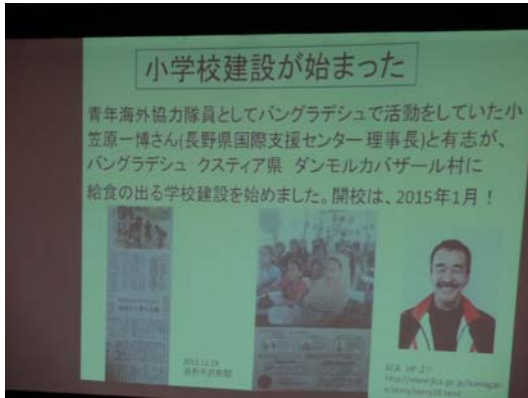


2014 国際教養科 NEWS 2月

「 Bangladeshにおける国際貢献について」 清泉女学院大学との高大連携の取り組み



1/17 (金) に、長野市にある清泉女学院大学人間学部から学部長の室井美稚子先生、和田順一先生及び学生2名が本校に来校し、国際教養科2年生40人を対象に講演をしていただきました。

同大学では、2～4年生9人が、県国際協力支援センター(駒ヶ根市)が目標とする Bangladeshでの小学校建設事業に賛同し、現地の子どもたちに届ける文房具を集め、2月10日から約10日程度現地を訪問し、届ける予定になっています。そこで、Bangla

デシュの様子を紹介し、支援の輪を広げるために本校を訪れました。

中心になって、講演をしていただいた同大学3年生の伊藤さんは、DVDやパワーポイントなどの視聴覚機器を有効に使い、とてもわかりやすくお話をさせていただきました。またクイズを出してペアで考えさせたりと、時には聴衆とインタラクションをとり、聴衆の反応を確かめながら、明るく、意欲的にお話を進める姿はとても立派なものでした。このような聴衆を引きつける素晴らしい発表は、特に卒業論文プレゼンテーションコンテストを控えた本校2年生にとっては大きな刺激になり、学ぶ点が多かったです。

また、Com. LL 授業で模擬国連を行い、「児童労働」についてリサーチし、学習したことも、Bangladeshの現況を理解するのに役だったようです。

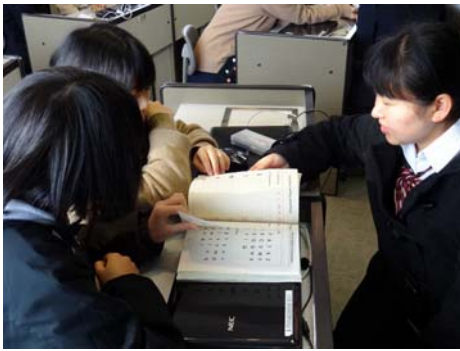


講演後、国際教養科2年生のクラスは、Bangladeshへの支援を決め、ホームルームで全クラスを回って各家庭で使用していない文房具を集める呼びかけを始め、多くの物品が集まりました。



今日の講演では、教育がいかに大切なことを学ぶことができました。世界が発展していけばいくほど、教育を受けられる人と受けられない人との間で格差が生まれてしまい、今の世界では、教育を受けられない人が損や苦勞をするようになってしまっていると思います。世界は発展しているのに、

それに追いついていない部分の世界にはたくさんあって、それを解決していかないと本当には世界は豊かになれないと思います。(国際教養科2年女子)

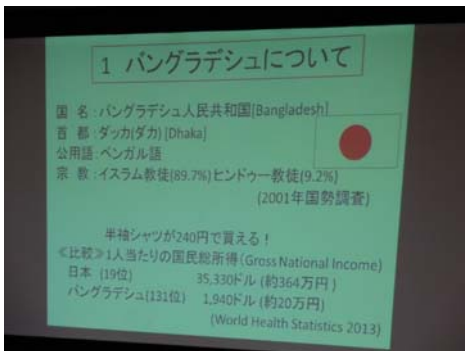


バン格拉デシュに行かれる伊藤さん(大学生)や室井先生のお話をお聴きました。私はバン格拉デシュに関する知識はほとんどなかったので、現地の状況を知り、とても衝撃的だったし、日本を始めとする先進国との格差の大きさを実感しました。教育状況も良くなく、実際の教科書も見せていただきましたが、日本のものとは比べものにならないほどでした。いかに自分が恵まれているかを痛感し、無気力に生きている自分を反省しました。

(模擬国連の授業で)児童労働について調べた際にも、学校に通うことになったことで、児童労働が減少したという調査結果が出ました。(児童労働を減らすには)教育を受ける機会が増やすことが大事だと思いました。(国際教養科2年女子)



伊藤さんの発表は、自分たちがこれから取り組む予定のボランティア活動のこと以外でも、プレゼンテーションの仕方やパワーポイントのまとめ方など学ぶことが多くありました。(国際教養科2年女子)

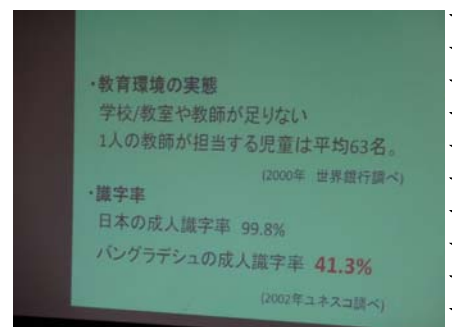


私が考えるバン格拉デシュのような貧しい国への支援は、このような講演会や出張授業を聴いて、貧しい国の状況を多くの人に知ってもらい、一人ひとりがそのことについて考え、行動を起こすことだと思います。考える人が多ければ良いアイデアも多く生まれ、その活動は悪い状況を良くします。そのような流れが多くできれば、貧しい国も自然と良くなりと思います。知って、考えることはとても重要だと思いました。(国際教養科2年男子)

バングラデシュが厳しい貧困に悩まされており、教育の状態も悪いということは、少し調べて知っていましたが、成人識字率が5割を切るということは知りませんでした。字を読めないということは生死に関係するほど大切なことだと、講演中に出されたクイズから痛切に感じました。字が読める私たちは、この環境に感謝しなければならないと思いました。



(国際教養科2年女子)



「異文化間コミュニケーション」 信大教育学部との高大連携授業② 小池先生と信大生 5 名来校



1/23 (木) に、本校の卒業生でいらっしゃる信州大学教育学部 小池浩子先生に、国際教養科 1 年生を対象に「異文化間コミュニケーション」というテーマで授業を行っていただきました。今回の授業では、トランプのゲームでグループごとにルールを変えることによって、異文化と接触し、交流した時の心理状態と「異文化」の人たちとの対人関係について擬似体験しました。多くの生徒は、授業の感想に、「固定観

念や自分たちの価値観で、異文化の人と接触、交流すると、混乱した状態になることがよくわかった」と書いてあり、トランプを使ったシミュレーションを通して、異文化理解の基本を学びました。体験型授業なので、とても印象に残ったようです。

今年度、小池先生に異文化理解の授業をお願いするのは、昨年の 10 月 (対象は国際教養科 2 年生) に続き 2 回目になりますが、今回は小池先生のゼミの信大生も 5 名来校し、クラスに入って、高校生と交流していただきました。さすがに教師を目指す学生さんだけあって、授業中は 1 年生の生徒に上手にアドバイスし、本校生徒に溶け込んでいただき、中には一緒にゲームに加わってくださる学生さんもいらっしゃいました。1 年生にとっては、良き先輩として、とても良い刺激になり、授業後も大学生に積極的に話しかけたり、進路のことで相談したり、一緒に写真を撮ったりして、明るく、楽しそうに交流する姿を見て、本当にありがたく、うれしく思いました。西高のすぐ近くに、こんな素晴らしい大学生がいるので、もっともっと高大連携が深められればとつくづく思いました。



今回の小池先生と信大の大学生の方による授業では、トランプを通して、異文化を体験しました。私はまさかグループごとにルールが違うとは思わなかったので、最初のゲームは良かったのですが、次のチームに移動した時、ルールが違うので困りました。最初のカードを配って出すところまでは良かったのですが、私は (最初のグループのルールにより) 小さい数字の方が強いと思っ



ており、私のトランプの数字が一番小さかったので、(切り札として、) 場に出されたカードを全てもらえたと思いました。ところが、場にあったカードはなぜか違う人が全部取ってしまいました。私と一緒に、同じチームから移動してきた人と顔を見合わせて、おかしいなと思いました。その後、あることに気づいたその人は、紙に「 $1 < 7$ 」「 $1 > 7$ 」と書き、みんなに見せて、解決しました。どのグループも言葉がしゃべれないのは共通のルールだった中で、この不等式を用いた方法で、グループごとのルールの違いを示せたのはすごいと思いました。しかし、実際、海外に行き、現地の人だらけの中では、今回のような状況よりも厳しいと思います。今回の体験をふまえ、私は異文化の中でコミュ



ニケーションをとるには日本にいる時の常識にとらわれてはいけないと思いました。今回のゲームに例えると、最初の私たちのグループで配られた紙のルールが日本にいるときの常識とすると、次に移動したグループのルールが他国の常識です。異文化理解では、自分たちの価値観や固定観念を押しつけるのでなく、「そういうものなんだ」と心を広く持つことが大切だと思いました。(国際教養科1年女子)



私が今日 体験した混乱は、1 回目に他のグループに移動した時のことです。相手が自分とは違うやり方で場に出されたカードを取っていく理由が最初はわからず、とても困りました。そして、次第に「この人はちゃんとルールを読んだのかな？」なんて思ったり、イライラしたりもしました。最後にトランプが終わった後、(小池先生から種明かしを聞き、) 実はグループごとにルールが元々違って、それが異文化交流に例えられていたことを知り、ちょっとびっくりしました。楽しいと思っていた異文化交流が、実はとても誤解を生みやすく、難しいものだとは発見したからです。今日の授業から、異文化交流では楽しむことも必要だが、まず、相手を理解し、受け入れる心を持っていることが大切だと考えさせられました。これから、将来、たくさんの国へ行きたいと思っています。その時に必要なことを今から考えておこうと思いました。(国際教養科1年女子)

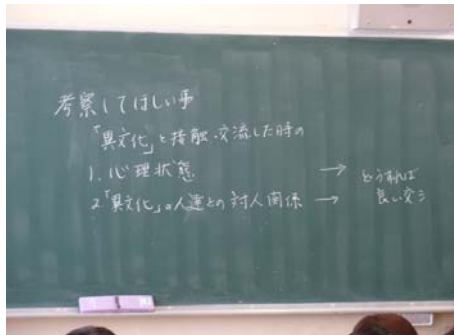
僕はこのトランプゲームのルールは世界各国の「常識」なのではないかと考えました。たとえば、食文化ですが、ある国では当たり前食べるものが、別の国では「(食べるのは)おかしい。ありえない。」となってしまうということです。だから異文化交流で大切なのは自分の常識を捨てることだとそんな気がしました。(国際教養科1年男子)

普通日常生活を送っているこの瞬間でさえも、今回のトランプゲームの中で起こったような事が起きるかもしれません。そのような事が目の前で起こった時に、どれだけ柔軟に対応することができるかが、自分たち国際教養科生徒の課題であると思います。これから海外研修などの国際的な行事があるので、自分はどのように相手を受け入れ、自分も発信していくのかも、しっかり考えていきたいと思っています。(国際教養科1年男子)



グローバル化が進む中、これからいろいろな国の人と関わることが多いと思います。その時に、今回学んだ事を活かし、語学の力だけでなく、その土地での適応能力を身につける事も同時にしていきたいと思っています。(国際教養科1年女子)

私の今までの交流では、お互いの違いをある程度知った上でのものだったので、お互いのものを否定し合ったり、自分の方が正しいと主張し合うことは「異文化コミュニケーション」という中では初めてでした。でも、世界で起きている問題、そして身近で起こる問題の原因の一部は、自分の知識や思想が正しいと常に思っているからではないかと気づきました。今までは問題があるならば、話し合えばいいなどと簡単に思っていたけど、きっと話し合いだけではお互いに納得できないだろうと今回 身をもって体験できました。(国際教養科1年女子)



私の今までの交流では、お互いの違いをある程度知った上でのものだったので、お互いのものを否定し合ったり、自分の方が正しいと主張し合うことは「異文化コミュニケーション」という中では初めてでした。でも、世界で起きている問題、そして身近で起こる問題の原因の一部は、自分の知識や思想が正しいと常に思っているからではないかと気づきました。今までは問題があるならば、話し合えばいいなどと簡単に思っていたけど、きっと話し合いだけではお互いに納得できないだろうと今回 身をもって体験できました。(国際教養科1年女子)